

## フランスの大学案内

竹 沢 尚一郎

(昭和 53 年修士修了)

いつのまにか、初めてフランスにきたときから  
数えると 5 年になる。もっとも、その間中この土

地にいたわけではなく、アフリカに調査にいき、  
病気にかかり、日本で療養してということがあっ

たので、フランス滞在はまる3年ということになる。論文はほぼ終わったので、なんとか今年中に提出して、来年のはじめには口頭試験にまでたどりつきたいと思っている。

さて、フランスについてなにか書くべきなのだが、もちろん学的状況などというだけそれたものを書けるはずはない。ここで、個人的感想をのべるのもどうかと思われる。それで、できるだけ具体的な知識を提供することを目的にしてみたい。あるいは、これから留学しようという人がいるかもしれないので。

フランスの大学制度は、学部、修士、博士の順に、第1課程(1<sup>er</sup> cycle)、第2課程(2<sup>ème</sup> cycle)、第3課程(3<sup>ème</sup> cycle)となっている。今のところ最短で6年、最高は何年まで可能なかわからない。いずれにせよ、日本で修士を終えていれば、第3課程の1年目に登録することができる。この1年目がD. E. A. とよばれ、この年の終わりに数10ページの研究計画、もしくは論文要旨を提出することが要求されている。フランスの大学制度は、一般に上へいくほど容易になる傾向があるので、博士課程となると、ほとんど義務はない。主任教授のゼミだけとってあれば十分であるし、とらなくても特別問題になることはない。要するに論文さえよければよいというのである。

ただ、現在この第3課程の改革がおこなわれつつあり、次年度、つまり85年9月より、かなりの変更が生じることが予告されている。この改革の骨子は、現在第3課程博士と国家博士との二本立てになっているのを、一本化すること、それにとりなって、博士期間の延長と、D. E. A. 論文の強化ということである。これまでは、たとえば第3

課程論文を提出して、それがよいものであれば、CNRS などの研究機関に就職して、そのうえで国家博士論文を準備する。そのあとで教授等になる、という手順であったのが、この手順が大幅に変更されることになる。ただ、今のところ、それ以上の詳細は知らされていない。

つぎに宗教学関係の研究機関であるが、パリにあるセンターとしてもっとも重要なのは、うたがいなく社会科学高等研究院(Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales) と、高等実践研究院(Ecole Pratique des Hautes Etudes) の第5セクションである。この二つは、大学とは独立した、いわば大学院大学であり、前者はむしろ社会学系、調査主体、後者は人文系、文献学的という傾向をもつ。前者は、人類学、社会学、記号学、社会史に強く、後者はキリスト教を含めた世界中の宗教を網羅している。ただ後者のばあい、ここで博士論文を発行することはできないので、ソルボンヌ(パリ第四大学)、ジュスイユー(パリ第七大学)等に指導教官をみつけなくてはならない。

ながらく人文王国であったフランスであるが、近年の経済不振にともない、人文系、ついで社会学系の地盤沈下がめだっており、この二つで教職を見つけるのはきわめて困難になっている。友人のあるフランス人などは、去年提出した博士論文が出版されるほどすぐれたものであったのに、それでもフランスで職をみつけることはできず、三年間西アフリカのオートボルタ大学で教えることを余儀なくされた。いまは、洋の東西を問わず、研究者にとって受難の時代であるというべきかもしれない。